



Title	ラプソディ史補論
Author(s)	伊東, 信宏
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2014, 48, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56607
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ラプソディ史補論

伊 東 信 宏

キーワード：ラプソディ／音楽の民族主義／フォークロリズム／異国趣味／E.リスト

はじめに

本稿は、筆者が最近書いた別の論考「音楽におけるナショナリズム：ラプソディの歴史と第一次世界大戦」（山室信一他編『現代の起点：第一次盛會大戦 3 精神の変容』岩波書店、2014年所収、以下「前稿」と表記する）に対する補論である。この「前稿」は、第一次大戦が西洋文化（およびそれに影響を被った地域）において持っていた意味を、「ラプソディ」という一つのジャンルの歴史を通して見直してみる、というものだった。この論文を準備する過程で、筆者は19世紀以来、連綿と書き継がれてきた様々な「ラプソディ」を収集し、そのリストを作ってみた。この作業は、後で述べるように、これまでも何人かの研究者が試みており、決して全く新しいものというわけではない。また、古今東西の有名無名の全ての「ラプソディ」を網羅する、ということは不可能であり、リストアップできた「ラプソディ」は、あくまでも出版された記録があるもの、後世に伝わっているもの、あるいは多少とも音楽界に認知されているものに限られている。それでも目につく範囲でこれらの「ラプソディ」を整理してみると、これが19世紀から20世紀の音楽史のミニチュアのように見えてきて、筆者はしばらくこの作業に魅了された。「前稿」は、第一次大戦を主題としているので、このラプソディのリストから浮かび上がってくる問題の全てに触れ得たわけではないし、「ラ

プソディ」のリストも紙幅の関係から、最小限のものに絞らざるを得なかった。そこで、本稿では、この「ラプソディ」のリストをなるべく包括的な形で示すことを主目的とし、加えて先の論考では触れ得なかった論点について、いくつか補足的に論じておくことにしたい。「前稿」との重複はなるべく避けるが、本稿自体の完結性という意味で、多少の反復はやむを得なかったことをお断りしておく。

1. 「ラプソディ」の位置：音楽の民族主義

音楽において「民族主義」が問題になり得るためには、音楽と国家^ネ／国民^イ／民族^シ／民族^ヨの間に何らかの連関を見る必要がある。しかも、それは音楽の作り手（作曲者、演奏者、伝承者）の側だけではなく、受け手（聴衆、民衆）の側にも共有されていなければならない。具体的には、ある音楽の要素（たとえば音階、旋法、リズム、楽器法、修飾法等）が民族的なものである、と認められ、しかもこの認識が国境を超えて聴く者の多くに浸透していなければならない、ということである。このような条件が整うのは、音楽の場合かなり遅かった。工芸品や衣料なら、旅先から持って帰って、自国の人々と分かち合うことができる。そうであればこそ、異国の事物を愛でることもできるし（エクゾティシズム）、隣国と自国の文化的差異を意識してそれをナショナリズムの根拠とすることもできる。けれども音楽や踊りは持って帰れない。楽器は持って帰れても、演奏は持って帰れない。もし異国の音楽を聴く機会があるとすれば、（録音機の発明以前には）遠くから旅の楽団がやってくるというような例外的機会を待たねばならなかった。例えばオスマン・トルコが、当時のヨーロッパの有力な宮廷に楽団をプレゼントした、という18世紀の事例は、そのような例外の一つである。ウィーンのハプスブルク宮廷にズルナと太鼓を中心とするトルコのイエニチェリ楽団が雇用されるようになったのは1741年のことである。熱心なオペラファンで、詳細な日記を残したことで知られるカール・フォン・ツィンツェンドルフ伯爵

(1739～1813年)は、次のようにその強烈な印象を記している。(1763年7月15日)。

「昨日、シェーンブルン宮殿でハルシュの部隊が奏するトルコ音楽を聴いた。これは世界で最も素晴らしい効果をあげるものだ。」¹⁾

これは異国の音楽の特質(後に音楽における「民族性」と考えられるに至るもの)が、聴衆によって意識されるようになった顕著な記録である。このような経験が聴衆に共有されるようになってはじめて、グルックは『メッカの巡礼、または思いがけない巡り会い』(1764年)で「トルコ風音楽」を書いて、この異国の舞台を音楽に反映させることもできた。そして、これとほぼ同じ時期に、ヘルダーが『オシアンおよびいにしへの諸民族の歌謡をめぐる書簡より』*Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker* (1773年)においてVolklied「民謡」という言葉を初めて用い、さらに『歌謡における諸民族の声』*Stimmen der Völker in Liedern* (刊行は1867年だが、その原型は1773年に遡る)を構想して、異国の民の歌を記録しようとしたこともおそらく異国の音楽が具体的に身近に知られるような時代になったことと無関係ではない。

ここではいくつかの水準の出来事がほぼ同時に起こっている。まず異国の音楽の実相が知られるようになり、耳慣れぬ音楽への関心が高まる(音楽の^{エクゾティシズム}異国趣味)。この「遠くの」人々の音楽は、時間的に遠くの「古代の」人々の音楽と共振する現象だった。「遠くの」「古代の」人々を、自然の感覚を失っていない生きいきした藝術の担い手として称揚する、という論じ方は、いわば啓蒙主義のネガだったのだが、この感じ方は同じ社会の下層にいて啓蒙の光の及ばない「民衆」にも目を向けさせることになった。かくして、音楽における「^{エクゾティシズム}異国趣味」「^{アルカイスム}古代趣味」「^{フォーク}民俗への関心」が絡まりあいながら成立し、これが19世紀における音楽の^{ナショナリズム}民族主義の展開のための素地となった。

本稿で扱うラプソディというジャンルは、まさしくこのような音楽の民族主義を考えるのに格好の素材である。音楽によって民族主義を表現する際の重要な場であった国民オペラや自国語による歌曲が結局のところ、言語を問

題としていたのに対して、実際に音符のレベルで民族主義を表現しようとする作曲家は、一度はこの「ラプソディ」というジャンルに向き合わねばならなかった。従属民族や少数民族は、自分たちが誇るべき文化をもった民族であることを証明するために、自前のラプソディを持とうとした。本稿で示すようなおびただしい量のラプソディを見ていると、19世紀後半から20世紀前半までの約一世紀の間、人々はそのような信憑を競って内面化していたように思われる。それは「古代趣味」を基礎として成立し、「異国趣味」と、それと裏腹の関係にある「民俗への関心」をともに反映しながら、器楽における音楽の民族主義の主要なジャンルへと発展する。そして、第一次大戦を転回点として「民族主義」が辿らねばならなかった屈折を忠実に反映し、やがて衰退していった。ここでは、このような「ラプソディ」というジャンルの歴史を概観し、その展開を辿り、このジャンルが音楽史において持っていた意味のうち、「前稿」で触れ得なかった問題について補足的に確認しておきたい。

2. 「ラプソディ」の定義

「ラプソディ」という言葉の定義については、「前稿」でも述べたが、ここでは必要なことを確認しておきたい。この言葉は現在ではもっぱら音楽のジャンル名として知られているが、本来は古代ギリシャにおいて唱えられる叙事詩を指した。19世紀はじめに音楽ジャンルの名称として用いられるようになり、やがてそのジャンルの特質としての不規則性は、「ラプソディックな空模様」といった幾分否定的な転用まで生むことになる。このような語義の変遷を、厳密に整理したT・ヴィドマイエルの記述を元に辿ってみよう²⁾。

まず「ラプソディ」の語源となったギリシャ語 $\rho\alpha\psi\omega\delta\iota\alpha$ (rhapsodia) は、 $\rho\acute{\alpha}\pi\tau\epsilon\iota\nu$ (raptein) と $\omega\delta\eta$ (ode) から成り、前者は「縫いあわす」を、後者は「詩」を表すことから、元々は様々なテキストを「縫いあわす」ようにし

て語る古代ギリシャの語り物文芸のことを指した。その語り手は *ῥαψῳδός* (rhapsodos) と呼ばれた。この基礎の上に、近代以後、次のような意味が生まれてくる。

1) 16世紀以後には、「ラプソディ」は多少とも技巧的に組み合わせられたテクストを指し、文学から音楽に比喩的に転用されることもあった。18、19世紀においては、様々な素材を並べ、つなぎあわせたもの、という意味で用いられるようになり、時としてそれは、「不出来な継ぎ接ぎ細工」という否定的な意味でも使われた。例えば、W.ヘーベンシュトライト編纂による『学術的文学的美学百科』（1843年）においては、「音楽において、ラプソディは本来、断片ないし引きちぎられた音楽の破片を組み合わせせて作られた曲、ないし短くてほとんど無秩序な幻想曲という意味を持つ」³⁾とされている。

また、多様な内容の文章を集めた論集にタイトルとして用いられることがあったが、音楽に関するものとしてはC. F. H. シューバルトの論集『音楽的ラプソディ』（1786年）くらいしか見られない。J. Fr. ライヒャルトの歌曲「ラプソディ」（1870年刊行）、およびブラームスの「ラプソディ」（通称『アルト・ラプソディ』1870年）は、いずれもゲーテの「冬のハルツへの旅」を歌詞とする作品だが、この場合は「テクストの一部に音楽をつけたもの」というような意味だったようだ。

2) 古代の朗唱家のイメージが広まった17、18世紀には朗唱ないし口述のパフォーマンスに関して革新的方向を指し示すもの、という意味でつかわれることもあった。

3) 19世紀前半には「性格的小品」（特にピアノ曲）のタイトルとして用いられるようになるその最も早い例は、V・J・トマーシェクの「ピアノのためのラプソディ」Op.40（1813/14年）であろう。彼は後の自伝で、この作品について、次のように述べている。

「そのような〔交響曲やソナタといったジャンルの〕圧迫で、私は自分の創作の避難所を求めざるを得なくなり、そして様々な詩のジャンルを音楽に移植し、そのことによって、ともすれば狭まりがちな音楽詩の世界を広げる

ことができないか、と考えるようになった。・・・私は厳肅さが力とエネルギーとに結びついたような作品を作りたかった。そのとき、私の脳裏に、まるで魔法のように鮮やかに、ラブソデー〔ラブソードス〕たちの活躍する太古の世界が現れた。私は彼らがホメロスの『イーリアス』のあらゆる詩行をいかに朗誦し、皆がそれにどれほど熱狂したか、を目にし、耳にしたように感じた。⁴⁾

この文章から明らかなのは、このとき「ラブソディ」というタイトルは序論で述べたような「古代趣味」の関連で喚び出された、ということであろう。トマーシェクは、この頃「ラブソディ」と共に「エクローグ（牧歌）」や「ディテュランボス（酒神讃歌）」といった古代ギリシャに由来するタイトルを持つ作品を書いていた。「ラブソディ」もそのような文脈から選ばれたものだろうと言える。実際に比較してみると、「エクローグ」との対比において「ラブソディ」は、厳肅で、力強く、決然としたもの、といったニュアンスを持っていたようだ。

4) F・リストの『ハンガリアン・ラブソディ』（1851/53/82/86年）は「ロマが伝えるハンガリーの民族的アイデンティティを規定する叙事詩の断片をつなぎあわせたもの」とされた。この作品をきっかけとしてラブソディは「形式的には結びつきが緩く、しばしば民俗的旋律を用いた器楽曲ないし声楽曲」を指すようになる。例えば、1882年の『リーマン音楽辞典』においては、「現代の作曲において、ラブソディという名の下に理解されているのは、民俗的旋律をいくつか組み合わせて出来た器楽による幻想曲である」という記述が見られる。⁵⁾ 先に挙げたヘーベンシュトライトによる規定が、リストのハンガリアン・ラブソディ以前のものであって、そこに民族的／民俗的含意が全く含まれていなかったことと比べると、この語義の変容は明らかであろう。

かくしてリストの作品以降「ラブソディ」は、音楽のジャンルとして広く認知されるようになり、本稿の表で示すように、それぞれの民族や地域の名を冠する大量のラブソディが生まれることになった。

さらに主に世紀転換期から第一次大戦頃までのイギリスで「声楽曲のシリーズ」に対して用いられるケースが増える。これらの作品は、「バラード」「カプリッチオ」「ファンタジー」「ポップリ」「組曲」「交響詩」などと呼ばれても不思議ではなかったような内容をもっていた（後述の「声楽的ラプソディ」）。

20世紀後半になると、「ラプソディ」の指すものは変質してくる。たとえば、V・ジャンケレヴィッチの著作『ラプソディ』（1955年）においては、ラプソディは「非人称的で抽象的な普遍主義」に対立する「多元性の原理」だった⁶⁾（合田正人『ジャンケレヴィッチ：境界のラプソディ＝』より）。だとすれば、ナショナリスティックな統合のベクトルを持つものだった19世紀のラプソディからすると、完全に逆の方向を含むことになって、この語の流行としての寿命が尽きたことを示しているようにも思われる。

3. ラプソディ史におけるいくつかの論点

本稿の最後に掲げる表「ラプソディの系譜」は、音楽のジャンルとしての「ラプソディ」が確立して以来、世界で書かれた様々なラプソディを集めたものである。もちろん全ての「ラプソディ」を列挙しているわけではない。出版された作品だけでも網羅的に数え上げるには限界があり、全ての「ラプソディ」を盛り込むのは不可能である。そして年代的には1960年頃までのものを挙げており、それ以後ポピュラー音楽の文脈で現れた多くのラプソディ（クイーンの「ボヘミアン・ラプソディ」や、これはバンド名だがイタリアの「ラプソディ・オブ・ファイア」と称するメタル・バンドなど）も対象外である⁷⁾。このような制限はあるにせよ、この表からは次のようないくつかのポイントを読み取ることができる。（表では、作品名、作曲者名とも原語表記を原則としたが、ここでは文意を取りやすくするため、それをかなり意識してカタカナで表記する）。

まず注目すべきなのは、この「ラプソディ」というジャンルが、もともと

持っていた語義から離れ、民族的なアイデンティティ表出の場へと変貌を遂げた経緯である。前述のとおり、この語は本来的には「古代趣味」の領域から喚び出されたのだが、19世紀半ばのF. リストによる改鑄に伴って、「民俗的／民族的旋律をつなぎあわせた器楽曲」という意味を持つようになる。そして、19世紀後半から20世紀前半にかけての約1世紀の間に、様々な民族、国家、地域アイデンティティを託したラプソディが続々と作られることになった。それらは時代を反映し、植民地における宗主国の作曲家によるラプソディである場合もあれば、被支配民族を代表する作曲家によるラプソディという場合もあり、未だ国家として認められていない一地域の名を冠したラプソディである場合もあれば、抽象化された「異国」「黒人」の名を冠するラプソディという形をとることもあった。そして東欧、北欧から始まり、周囲論的に広がりを見せ、時とともにアジア、新大陸、アフリカの諸地域も巻き込んでゆく。この大きな流れは、表からまず最初に読み取られるべきものであると考えられる。

ただしここにはいくつかの留保が必要である。第一に、この間に書かれた全てのラプソディが上記のような民族主義的な意味合いを持っていたわけではなく、世紀転換期前後の英国において書かれた様々なラプソディは、主として声楽曲であり、「ラプソディ」のタイトルは、説話的・叙事詩的なものを指していたようである（表中、網掛けのある項目は、この一連の「声楽的ラプソディ」を示している）。

また上記のような民族主義的ラプソディが少数民族や被支配民族においては、極めて熱心に書かれたのとは対照的に、フランス、ドイツ、イタリアといったヨーロッパ音楽の中心に位置した諸国においては、影が薄かったことは注目に値する。「ドイツ」を対象とするラプソディは1907年にF・E・コッホによって書かれ、「イタリア」は1909年、A・カゼッラによって、「フランス」は1911年フローラン・シュミットによって書かれているが、いずれも20世紀に入ってからのものであり、作品の規模として控え目であったり、変則的であったりした。また手がけた作曲家も、それぞれの国を代表す

る作曲家とは言い難いところも面白い。ドイツのブラームス、フランスのドビュッシーなど、著名な作曲家も「ラプソディ」と題された作品を書いているが、ブラームスのものは前述のとおりリスト的な意味での「民族的」ラプソディではないし、ドビュッシーの作品はマイナーな性格的小品であったに過ぎない。

以下に掲げる表は、音楽における民族主義という一つの考え方が、何をきっかけにして定着し、どのようにして広まり、どのように命脈を終え、さらにその有効性を終えたように見えながらどこに生き延びるか、ということを考える手頃な例を示している。音楽と社会との関係を示すモデルケースとしてここに提示しておきたい。

表：ラプソディの系譜（網カケの項目は「声楽的ラプソディ」を表す）

曲名	作曲家	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
Rhapsodie (Aus der Harzreise)	J. Fr. Reichardt	1790		ゲーテやシラーなどと親交があった作曲家、ライヒャルト（1752-1814）による歌曲。ゲーテの詩「冬のハルツへの旅」に付曲している。
Rhapsodie pour le pianoforte, Op.40	V. J. Tomášek	1813, 14		本文参照。
Rhapsodie	N. Burgmüller	1835/36		ピアノ教則本で有名なヨハン・ブルクミュラーの弟、ノルベルト・ブルクミュラー（1810-1836）による小品。
Ungarische Rhapsodien I-XIX	F. Liszt	1851/53/ 82/86	ハンガリー	本文参照。
Rhapsodie espagnole	F. Liszt	1858	スペイン	1845年のスペイン旅行に基づく。リストにはこの他に、ロシア、ポーランド、フランスなどの旋律を使った編曲作品がある。
Die Rhapsodie für eine Altstimme, Männerchor und Orchester, op. 53	J. Brahms	1870		ブラームスは先に挙げたライヒャルトの「ラプソディ」を通じて、ゲーテの「冬のハルツへの旅」を知り、この曲を作って、同じタイトルを付した。
Norsk Rapsodi 1-4, Op.17,19,21,22	J. Svendsen	1877(1-3), 1878(4)	ノルウェー	スヴェンセン（1840-1911）。オスロ（クリスチャニア）生まれ、ほとんどをコペンハーゲンで暮らした。ちなみに作曲当時、ノルウェーはスウェーデンの支配下で、独立は1905年。L. リンデマンのピアノ編曲集『ノルウェーの新旧の民謡旋律』（1853-67）にヒントを得た。

曲名	作曲者	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
3 Slawische Rhapsodien, Op.45	A. Dvořák	1878	スラヴ	チェコの歴史的情景を描いた作品、とされる。
Rhapsodies, Op.79	J. Brahms	1879		献呈されたヘルツォーゲンベルクの要請によって、「ラプソディ」と改題されたピアノ独奏曲。
Rhapsodie norvegienne	E. Lalo	1879	ノルウェー	ラロ (1823-1892) は、バスクの血を引くフランス人。ヴァイオリンと管弦楽のための『ノルウェー幻想曲』(1878年)の管弦楽版。
Rhapsodie ecossaise, Op.21	A. C. Mackenzie	1880	スコットランド	マッケンジー (1847-1935) は、スコットランドの作曲家。
Suite algérienne (No.2 Rhapsodie mauresque)	C. Saint-Saëns	1880	ムーア人	当時フランスの植民地だったアルジェリアへの紀行を描く。第2曲が「ムーア風ラプソディ」だが、第4曲はフランス軍がアルジェの街を行進する様子を描いた行進曲であり、政治的含意を隠せない。
Jihoslovanská rhapsodie	K. Bendl	1881	南スラヴ	ベンドル (1838-1897) はチェコの作曲家。ドヴォルザークの同窓。
Suomalainen rapsodia No.1, No.2	R. Kajanus	1881/86	フィンランド	カヤヌス (1856-1933)。1885年の交響詩「アイノ」はシベリウスに影響を与えた。
Rhapsodie cambodgienne	L.-A. Bourgault-Ducoudray	1882	カンボジア	ブルゴー＝ダクルディ (1840-1910) はブルターニュ生まれ。1) 序で、洪水の被害にあった人々の神への祈りが描かれ、2) でその願いがかない、見事回復した土地を称えての祝いが描かれる。
España, rapsodie pour orchestre	E. Chabrier	1883	スペイン	フランスの作曲家、シャブリエ (1841-1894) によるスペイン旅行の印象。
Rhapsodie d'Auvergne, Op.73	C. Saint-Saëns	1884	オーヴェルニュ	緩急の対照から成り、急の部分でバグパイプ風の音楽となる。オーヴェルニュ人→ミュゼット→パリ郊外のバルミュゼット (1880年代) →シャンソンへ
The Star. A Rhapsody for Tenor or Soprano Voice	Ch. K. Salaman	1886		ロンドン生まれのユダヤ系作曲家、サラマン (1814-1901) による声楽的ラプソディ。プラトンに基づく E. Arnold の詩による。
Rapsodia española, Op.70	I. Albéniz	1887	スペイン	ピアノ曲。他にピアノと管弦楽のバージョンもあった。アルベニス (1860-1909) はカタルーニヤ生まれで、リストの崇拜者でもあった。
Vostočnaja rapsodija (Orientalische Rhapsodie)	A. Glazunov	1889	東洋	1) Andante 「夕べ。町は眠る。見張り番の呼び声。若い大道芸人の歌。」、2) Presto 「若い男女の踊り」、3) Andante (a capriccio) 「老人のパラード」、4) Moderato alla marcia 「ファンファーレ。勝利した兵士たちの帰還。民衆の歓声。」、5) Allegro 「兵士たちの宴。踊りの中に若い大道芸人が現れる。遠慮ないオーギー。」

曲名	作曲者	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
Rhapsodie basque	Ch. Bordes	1890	バスク	シャルル・ボルド(1863-1909)は、フランス人だがバスク民謡の収集もおこなった。ピアノと管弦楽のための作品。
Irish Rhapsody	V. Herbert	1892	アイルランド	ハーバート(1859-1924)はアイルランド生まれでアメリカに帰化した。
Rapsodia Cubana, Op.66	I. Albéniz	1895	キューバ	アルベニス(既出)によるピアノ曲。
Armyanskaja rapsodija, Op.48	M. M. Ippolitov-Ivanov	1895	アルメニア	イッポリトフ＝イワノフ(1859-1935)は、ロシアの作曲家。出版されたコミタスのアルメニア民謡集を見て、このラプソディの作曲を思いつuitたとされる。
In Memoriam. 3 Rhapsodies for Low Voice and Pianoforte, Op.24	S. Coleridge-Taylor	1898		コールリッジ＝テイラー(1875-1912)は、ロンドン生まれのクレオール系の血を引く作曲家で、「アフリカのマーラー」と称された。
Rapsòdia almogàver	I. Albéniz	1899	(アラゴン?)	「アルモガバルス」はアラゴン王国の傭兵集団。
Rapsodia piemontese, Op.26	L. Sinigaglia	1900	ピエモンテ	シニガーリヤ(1868-1944)はトリノ生まれのユダヤ系作曲家。ヴァイオリン協奏曲風。
2 Rumänische Rhapsodien, Op.11	B. Enescu	1901	ルーマニア	エネスク(1881-1955)はルーマニア・モルドヴァ地方の生まれ。第一番には、ジプシーヴァイオリンの定番「ヒバリ」の引用。
Rhapsodie Nr. 2, Op.90	M. Kaempfer	1901	(シュヴァーベン)	シュヴァーベン地方の民謡を用いている。
Midsommarvaka, Svensk rhapsodi No.1, Op.19	H. Alfvén	1901	スウェーデン	アルヴェーン(1872-1960)。第1番「夏の徹夜祭」1901年。スウェーデン民謡に基づく。第2番「ウプサラ・ラプソディ」1907年、リンネ生誕200年のために書かれた。第3番「ダラーナ狂詩曲」1932年。
Meg Blane. A Rhapsody of the Sea for Mezzo-Soprano Solo, Chorus and Orchestra, Op. 48	S. Coleridge-Taylor	1902		コールリッジ＝テイラーは既出。T. ブキャナの詩による。
A Night's Rhapsody. Part Song for Two Female Voices, No.5	M. L. White	1902		H. E. Clarkeの詩による。
Irish Rhapsody No.1, Op.78	C. V. Stanford	1902	アイルランド	スタンフォード(1852-1924)はダブリン生まれ。Irish rhapsodyは第6番(1923年)まで書かれた。
Indian Rhapsody	Fr. H. Cowen	1903	(?)	コーエン(1852-1935)はジャマイカ生まれ、英国籍の作曲家。

曲名	作曲者	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
Yevrejskaja rapsodija, Op.7	V. A. Zolotarëv	1903	ヘブライ	ゾロタレフ (1873-1964)、タガンログ生まれのロシア人。
The Time-spirit, Rhapsody for Chorus and Orchestra.	Gr. Bantock	1904		バントック (1868-1946) は長くパーミンガム大学で教鞭をとった作曲家。夫人、ヘレナの詩に基づく作品。
Welsh Rhapsody	E. German	1904	ウェールズ	ジャーマン (1862-1936)、ウェールズ系。4つのウェールズ民謡を使っている。
Dem Verklären. Eine hymnische Rhapsodie, für gemischten Chor, Bariton und großes Orchester, Op.21	Max von Schillings	1905		シリングス (1968-1933) は、反ユダヤ主義者で、ナチスへの協力の故に上演されなくなった作曲家。この「賛歌的ラプソディ」の副題を持つ作品は、シラーの詩に基づく。
Kubla Khan. A Rhapsody for Contralto Solo, Chorus and Orchestra	S. Coleridge-Taylor	1905		コールリッジ＝テイラーは既出。この他に、Once Only (1906), Dea Drift (1908) など、ラプソディの副題を持つ作品がある。
Canadische Rhapsodie, Op.67	A. C. Mackenzie	1905	カナダ	マッケンジー (1847-1935) はスコットランド出身だが、1903年にカナダ民謡の調査を行う旅を行った。
Capriccio op een gamelang-melodie (Rhapsodie javanaise)	D. Schäfer	1906	ジャワ島	シェーフアー (1873-1931) はオランダの作曲家。
Rapsodia Litewska, Op.11	M. Karłowicz	1906	リトアニア	カルウォーヴィチ (1876-1909)、ポーランドの作曲家。タトラ山脈で雪崩に遭い、亡くなる。
Norfolk Rhapsody No. 1	R. Vaughan Williams	(1906, rev. 1914)	ノーフォーク	ヴォーン＝ウィリアムズ自身がノーフォーク地方で集めた民謡が用いられている。第2番もあるが未完。第3番は失われた。
Deutch Rhapsodie, Op.31	Fr. E. Koch	1907	ドイツ	ヴァイオリン協奏曲。コッホ (1862-1927) の兄、Max Kochは歴史画を得意とする画家。
Rapsodija na ukrainiskie teme, Op.28	S. M. Ljapunov	1907	ウクライナ	リャプノフ (1859-1924) はロシアの作曲家。ピアノと管弦楽のための作品。プゾーニに献呈。
Brigg Fair, an English Rhapsody	F. Delius	1907	英国	P. グレンジャーが1905年4月に録音した民謡に基づく。ディーリアスはグレンジャーのテナーと合唱のためのアレンジを聴き、この主題に基づく変奏曲としてこのラプソディを書いた。
Hallowing Night, Rhapsodie for Mezzo Soprano, Op.55	L. V. Fr. Saar	1908		サール (1868-1937) はオランダ生まれ、後にアメリカで活動した作曲家。この作品は、Fr. Hebbelの詩に基づく。

曲名	作曲者	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
Among the Trees, Choral- Rhapsody, Op.21	J. W. G. Hathaway	1908		ハサウエイ (1870-1956) はオックスフォード大学出身の作曲家、音楽研究者。メンデルスゾーンに関する研究書が今も読み継がれる。この作品の他に、バッハの平均律ト短調の主題に基づく Master Hugues of Saxe-Gotha, Op.35 (1910) も「合唱ラプソディ」の副題をもつ。
Rapsodie espagnole	M. Ravel	1908	スペイン	1) 夜への前奏曲、2) マラゲーニャ、3) ハバネラ、4) 祭り
Rapsodie pour orchestre et saxophone	C. Debussy	(1908), 1919	(ムーア人)	現行版の元になったスケッチには「ムーア風ラプソディ」というタイトルがついている。作曲家の死後、1919年に管弦楽化され現行のタイトルで出版。
The Wedding of Shon MacLean. A Scottish Rhapsody for Chorus, Soli, and Orchestra.	H. Bath	1909	(スコットランド?)	パース (1883-1945) は英国の映画音楽作家。R. Buchanan (1841-1901) の詩による。このスコットランド・ラプソディの他に、ウェールズ風ラプソディ (Look at the Clok, 1910)、アイルランド風ラプソディ (The Wake of O' Connor, 1913) も残している。
Rhapsodie aus Goethes 'Faust' für Chor, Soli und Orchestra. Op.3	K. von Wolfurt	1909		ヴォルフルト (1880-1957) はラトヴィア出身、ドイツの作曲家。
Italia. Rapsodia, Op.11	A. Casella	1909	イタリア	後半、突然「フニクリフニクラ」が出てくる。
1ère Rapsodie pour orchestre avec clarinette principale	C. Debussy	1910		音楽院試験のために書かれた小品。タイトルに「第一」とあるが、「第二」は知られていない。
Cáhl Mór of the Wine-red Hand, A Rhapsody for Baritone and Orchestra.	H. W. Parker	1910		パーカー (1863-1919) は、アイヴズの師として記憶されるアメリカの作曲家。この作品は J. C. Mangan が書いた 12-13 世紀のコノート王、カザル・モルに関する詩に基づく。
3 Rhapsodies: I-Francaise, II -Polonaise, III-Viennoise, Op.53	Fl. Schmidt	1911	フランス、ポロネーズ、ウィーン	2台ピアノのための作品。フローラン・シュミット (1870-1958) は、ロレーヌ地方のドイツ系フランス人。
Rapsodia mexicana No.1&2 for Piano	M. M. Ponce	1911, 1914	メキシコ	ボンセ (1882-1948) はメキシコの作曲家。ポロネーヤとベルリンで学び、後メキシコ国立音楽院教授。1915-17、キューバに滞在。
Gethsemane, Symbolic Rhapsody for Chorus of Mixed Voices and Orchestra.	G. Strube	1912		ストループ (1867-1953) は、ドイツ生まれでボルティモア交響楽団を設立した作曲家。

曲名	作曲者	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
Rapsodia polska, Op.25	Gr. Fitelberg	1913	ポーランド	フィテルベルク（1789-1953）は、現在のラトヴィア生まれのユダヤ系作曲家。
Rapsodia cubana No.1-3 for Piano	M. M. Ponce	1915/16	キューバ	ボンセ（既出）。キューバ滞在中の作品。
Taras Bulba, Rapsodia per orchestra.	L. Janáček	1915/18		ウクライナのコサックを主人公とする、ゴッリの小説『隊長ブーリバ』に基づく標題音楽。
Schelomo: Rhapsodie Hébraïque for Violoncello and Orchestra	E. Bloch	1916	ヘブライ	当初、旧約聖書「コヘレトの言葉」をテキストとする声楽曲として構想されたが、A. バルヤンスキの雄弁なチェロに触発され、また彫刻家であったバルヤンスキの妻のソロモン像を見て、チェロと管弦楽の作品として完成した。
Rhapsodie Danoise, Op.6	O. Olsson	1916	デンマーク	オルソン（1879-1964）はスウェーデンの作曲家。管弦楽曲。
Rapsodie nègre	F. Poulenc	1917	（黒人）	18歳のプーランクが書店で出会った「マココ・カングルー詩集」Les poésies de Makoko Kangourou という、黒人がフランス語で書いたという触れ込みの詩集に刺激されて書いた声楽曲。
Exotische Rhapsodie, Op.118	S. Karg-Elert	1917	異国（！）	カルク＝エーレルト（1877-1933）は、ドイツの作曲家。これはギーゼキングに献呈されたピアノ曲。
Česká rapsodie	B. Martinů	1918	チェコ	チェコスロヴァキア独立に際してイラーセクの演説への熱狂のもとに作られた。1919年1月12日初演。24日の再演には新共和国の大統領マサリクも臨席。
Sehnsucht. An das Meer. Rhapsodie für Altstimme, Klavier und Streichquartett	P. Graener	1920		グレーナー（1872-1944）は、ザルツブルク・モーツァルテウム、ライプツィヒ音楽院、第三帝国帝国音楽院などの要職にあった、作曲家。ナチスへの傾倒の故に戦後は忘れられた。ペートゲの詩に基づく作品。
A Psalmodic Rhapsody for Chorus, Tenor solo, Orchestra and Organ	Fr. A. Stock	1921		ストック（1872-1942）は、シカゴ交響楽団を育てたことで有名な指揮者、作曲家。
Bulgarian Rhapsody Vardar, op.16	P.H. Vladigerov	1922 （管弦楽版1928）	ブルガリア	パンチョ・ヴラディゲロフ（1899-1978）は、スイス生まれのブルガリア人。母やロシア系ユダヤ人でバステルナークの親戚。後、ソフィアの音楽院ピアノ科教授（現在のヴラディゲロフ音楽院）。ヴァルダールはブルガリアの川の名。つまりブルガリア版「モルダウ」。
Rhapsodie géorgienne, Op.25	A. Tscherepnin	1922	グルジア	チェレプニン（1899-1977）。チェロと管弦楽。
Rhapsody in Blue	G. Gershwin	1924	（アメリカ）	作曲中には「アメリカン・ラブソディ」と呼ばれていた。

曲名	作曲者	作曲年ないし初演年、出版年	対象となった国名、地域名、民族名	備考
Choral Rhapsody for Solo Quartet, Chorus and piano	T. C. Whitmer	1928		ホイットマー (1873-1959)。詩はホイットマンによる。
Rhapsody No.1, No.2	B Bartók	1928		ラヴェルの「演奏会用ラプソディ」(ツィガース)に対する音楽的返答。自身が集めた民俗音楽旋律(主としてルーマニア語地域のロマのヴァイオリン弾き達の旋律)をつなぎあわせて作られている。
Africa, Rhapsodia coloniale	A. Lualdis	1935	アフリカ	ルアルディス (1885-1971) はイタリア人。ムッソリーニへの協力の故に戦後忘れられた。
日本狂詩曲	伊福部昭	1936	日本	チェレブニン賞第1位。本来3楽章構成だったが、賞の規定にあわせて第1楽章をカット。以来現在の2楽章構成で知られる。
Rapsodie flamande, Op.56	A. Roussel	1936	フランドル	ルーセル (1869-1937) は、ここで16、17世紀のフランドルの歌を用いている。
Turkmenische Rhapsodie	A. Shaposhnikov	1939	トルクメニスタン	シャポシニコフはロシア人。1937-1949年、トルクメニスタンの首都アシガバードに滞在。
Rapsodia Negra	E. Lecona	1943	(南米?)	レクオーナ (1896-1963)。キューバの作曲家。他にラプソディ・クバーナ、ラプソディ・アルヘンティーナもある模様。
中国狂想曲	冼星海	1945	中国	Xian Xinghai (1905-1945)。バリ留学後、帰国。抗日歌曲を多数作曲した。
Rhapsody on Moldavian Themes, Op.47	M. Weinberg	1949	(モルドヴァ)	ヴァインベルク (1919-1996) は、ワルシャワ生まれのユダヤ系作曲家。一族はベッサラビア (現在のモルドヴァ共和国) の出身で、祖父や曾祖父は1903年のボグロム犠牲者。ナチの侵攻により、ソ連に亡命。ミンスク (ベラルーシ) →タシケント (ウズベキスタン) と移り住み、最終的にモスクワへ。ジダーノフ批判以後、民俗的作風に変化。このラプソディに帰結。
American Rhapsody, Op. 47	E. Dohnanyi	1953	アメリカ	ドホナーニ (1877-1960) 晩年の作。第二次大戦後アメリカに移住した。曲中、オクラホマ・ミキサナーなどアメリカ民謡が用いられる。

[注]

- この引用は、*Ch- W. von Gluck, La rencontre imprévue ou les pèlerins de la mecque*, Erato/ Radio France/ Opéra de Lyon, WE 815 ZA. 所収のB. A. Braunによる解説から訳した。
- T. Widmaier, “Rhapsodie”, *Handwörterbuch der musikalischen Terminologie*, H. H.

Eggebrecht (Hrsg.), A. Riethmüller (Fortführer), 35. Auslieferung, 2003.

- 3) W. Hebenstreit, *Wissenschaftlich-literalische Encyklopädie der Aesthetik*, Wien, 1843.
- 4) V. J. Tomášek, “Selbstbiographie”, *Libussa*, Prag, 1846, S.327-341.
- 5) *Hugo Riemann Musik-Lexikon*, Leipzig, 1882.
- 6) 合田正人『ジャンケレヴィッチ：境界のラブソディー』みすず書房、2003年。
- 7) このようにこれまで書かれてきた「ラブソディ」をリスト化するという試みは、すでに W. Salmen, *Geschichte der Rhapsodie*, Freiburg i. Br. 1966. に見られる。表 1 は、この情報を基礎に、T. Widmaier, *Op. cit.*, 他の情報を補い、本論文の目的に沿って整理したものである。

(文学研究科教授)

SUMMARY

An Addendum to the History of “Rhapsody”

Nobuhiro ITO

In this paper, I explore the history of the musical genre of “rhapsody.” I discuss the meaning and the transformation of “rhapsody” in the history of European and non-European music cultures. This paper also serves as an addendum to another paper by the same author which discusses the relationship between the history of rhapsody and World War I. Here, I include a comprehensive list of rhapsodies written from the eighteenth to the twentieth century. Based on this list, I conclude: 1) After Franz Liszt’s “Hungarian Rhapsodies” (1851-), the genre of “rhapsody” became a vehicle for the expression of national (or regional) identity. This trend gradually spread from Central Europe to the Scandinavian countries, the Balkan Peninsula, and Asia; and 2) there were also different types of rhapsody, including the “vocal rhapsody” written in the late nineteenth century UK.